

浄

monthly
JŌDO

土

10

October 2006



法然上人鑽仰会



念佛にいさみある人は、

無辺の悟りを開くべき人なり。

相かまえて願往生の心にて

念佛を相続すべきなり。

浄土

2006/10月号 目次

日本仏教の再生は可能か 法然上人の再来を求めて	上田紀行	2
念仏人と歴史 熊谷次郎直実	伊藤唯真	10
仏教コラム	大室了皓	15
上品上生を願った男	古井戸秀夫	16
曲説直実異聞	佐々木美冬	23
会いたい人 五十嵐喜芳さん	関 容子	27
響流十方	小村正孝	34
シネマ随想	袖山榮真	38
Jフォーラム		43
浄土誌上句会	選者=増田河郎子	44
マンガ さっちゃんはねっ	かまちよしろう	45
編集後記		48



表紙題字=浄土門主 中村康隆猯下
アートディレクション=近藤十四郎
協力=迦陵頻伽舎

法然上人鑽仰会
主催講演会

日本仏教の
再生は可能か

法然上人
の再来を求めて

Ⅱ

上田紀行

ここから仏教の話にしたいと思います。

現代の「条件付きの私だけが愛されている」、あるいは、「あるがままの私」が愛されている。そして、そういう苦悩があるというときに、私が思い返されるのは、やはり、日本仏教史の中では、法然上人ということになると思います。

まさにその当時比叡山では、宗教的なエリート、あるいは地位といったようなものがある人間のほうが、成仏に近い、あるいは救われるのだというような考え方があったことはどうも間違いないようです。

ですから、位の高い人間のほうが、やはり、救いに近いのである、というようなエリート主義が蔓延していた。まさに条件付きというわけです。

その時代に法然上人は、人間はこの世に生を受けているだけで存在意義がある。何の条件もなく救われるという、究極の無条件の救いを説いて、彗星のごとくあらわれたのです。これはどういうことなのかと、私は考えてしまうのです。

そして、法然上人が「専修念仏」をお説きになってから、何回も、弟子たちまでもが同じ質問を法然上人にしたわけです。

「やはり、念仏をたくさんやっていた人のほうが救われるんでしょう。修行をたくさんやっていた人のほうが、念仏を一回だけ言った人間よりも救われて当たり前じゃないか」ということを、質問してくる中で、「いや、あなたはわかっていない」と言って、執拗にそれを否定なさっています。

法然上人の現代性

つまり、この世の中の人間は、位が高い者、位が低いもの、善人であろうが悪人であろうが、平等に、弥陀の本願の前では全く平等なのだ、ということなのです。「救いの中の民主主義」、「救いの中の平等性」ということを述べられた宗教者というのは、日本の宗教史の中で果たして存在しているのだろうかと思われたとき、私には法然上人以外にはいないのではないかと思われるわけです。

それは、恐ろしい現代性を持っていて、その時代においては、非常に革新的というか、気が狂ったとしか思えないような発言だったと思います。ですから、比叡山のほうからは、繰り返し弾圧されたわけです。有名な明恵上人なども、法然上人のことに愕然としてしまったということです。

しかし、それは、自力ということで行くのではなく、ひたすら他力で行くんだということとを、終始崩さなかったわけです。

このとてつもない、平等への意志というのは、そこから世界中にいろいろな平等、という思想が生まれましたが、世界の思想の中でも、あの時代にそのようなことをおっしゃったというのは、とてつもなく飛び抜けているというふうに、私には思えるわけです。

それが現代とフィットすると思われるのは、まさに、現在が条件付きの私、というものでがなじがらめになっている。つまり、私は生まれてきただけでは祝福されてないんだ、ということとを、多くの子供たちが思っているということなのです。

そのような時代において、本当にあなたは生まれてきただけで祝福され、そして、生まれてきただけで、そして、どんな挫折をして、悪に手を染めてしまったにしても、あなたは既に生まれているというだけで救われているのだ、ということを説く、本当におめでとう、というふうに、一人一人に言ってくれる思想というものが、今必要とされているように、私には思われるのです。

そういう意味で言えば、日本仏教史の中では、法然上人のその革命的な主張というのは、ダイレクトに現代に届いてくると思いますし、この『生きる意味』（岩波新書）の中で書かせていただいた私の現代の苦悩というものは、本当にそこを真正面から撃ち抜く思想だと思われます。

もし法然上人が今いらっしゃったら、ただ「専修念仏」だけをおっしゃるかどうかな。

あるいは、他力ということに対しては、救いに向かつての他力であって、この社会の構造の中で、本当に困っている人がいることを、その社会改革などをするることによって、それを直していこうというのを自力だとは、おっしゃらないと思います。あるいは日本がこれだけ豊かな国になった場合、果たして、仏教者としてそこで何をおっしゃるであろうかということを考えたりいたします。

縁起の思想

今、ダライ・ラマやテイク・ナット・ハンなど世界を動かしている仏教者たちはどういう教えを説いているかというと、仏教の中心は縁起の思想ではないかということです。

仏陀が最初に法をお説きになったことは、^{ししょうたい}四聖諦という、四つの聖なる教え、つまり

「苦、集、滅、道」でした。生老病死は「苦」である。そして、「集」、それには原因がある。そして、「滅」、それは滅することが出来る。そして、「道」、そこには道があつて、その道のごとく生きていけば救われる、という教えだったわけです。

我々は苦しみを生み出しているものは、「諸行無常」であることがわかっていないとともにも、「諸法無我」であることがわかっていない。つまり、縁起がわかっていないからです。私たちは、すべてが関係性の中にあるということがわかっていない。縁起の法というのは、私がこんなところで言う必要もなく、関係性です。

例えば、私たちはこれをコップだと思いますが、このコップというのも関係性の中にあるのであつて、私との関係においてこれはコップになっているわけです。

しかし、これが何とか病院の泌尿器科の前にズラツと並んでいれば、だれもコップだと思わないと思います。「ご自由にお取りください」ということで、そこに麦茶とかがズラツと入っていたとしても、「おいしそうな麦茶だな」と、泌尿器科の検査室の前で飲む人は余りいないと思います。

つまり、このコップというのはどこにあつても、水を飲むものだと思つてしまうのは、私たちの誤謬であつて、これは器にしかすぎないわけです。

私はスリランカで、「悪魔払い」という民衆儀礼を研究したんですが、それも縁起と関わりがあります。病院でも治らない病気を治そうとして、悪魔払いをするわけですが、楽しい祭で、太鼓をたたいたり歌ったりして、徹夜でやるんです。そうすると、病人が治つてしまうという民族儀礼なんです。つまり、お釈迦様の力で悪魔が払われて、治るというわけです。

どんな人に悪魔がつくんですか、と聞いたら、「孤独な人に悪魔がつく。そして、孤独な人に悪魔の眼差しがくるんだ」と、スリランカの人たちは言うんです。

どういふことかというのと、皆さんが村人だとしますと、皆さんの眼差しが温かければ、私には悪魔がこないんです。「きょうはいいお話が聞いているわね」と思っていただければ私には悪魔はこないんです。

同じことが、学校のクラスだとすると、みんなが「おまえなんか死ね。おまえなんかは村八分なんだ」というような目で見られると、私は絶対に皆さんを刺すと思います。人間というのはそういうものじゃないでしょうか。

私の中には仏のような部分もあるけれども、とてつもなく悪もあります。それはだれでも知っていることじゃないでしょうか。それが、どのような生まれ育ちであっても、今どのような仲間に囲まれているかということで、出てくるわけです。

私が皆さんから「死ね」とか「おまえなんかは生きてる価値がない」という目で見られると、私は絶対にみんなの不幸を願うような人間になるという確信があります。

縁起というのは、もし私があそこのあの時代の、あの親に育てられていれば、どうなっていたのか。もし私が盗賊の家に生まれていて、育っていれば、まさに親孝行をするために、私は盗人になっていたでしょう。

私が本当に貧乏な国に生まれていて、そして、今のアメリカを見ていけば、本当に爆弾を投げていたかもしれません。

なぜこのような暴力が生まれているのか、なぜテロリストはテロリストになったのか、ということを考えなければならぬし、私の中にもテロリストがいるんだということを、

十分認識してから、どうするんだということを教えられているわけです。

ですから、その中で、ティク・ナット・ハンとかのエンゲージド・ブuddiズムの仏教者たちがみんな言っているのは、その人たちを悪と切り捨てるのではなく、それを生み出した縁起の中に悪があるということを見て、その縁起というものを、いい縁起に変えていかなければならない。そして、その見方で現在の社会を見るとしたら、その人が救われまい、というよりも、構造自体が救われまいからじゃないかというわけです。

慈悲から働きかける

暴力を生み出してしまうような構造がある。あるいは、人をねたんでしまうような構造があるわけですが、今はだれに対しても働きかけることもできるし、一人一人がまさに働きかけをすれば、貧富の差の問題とか人間の問題であるということとは、解決ができるのではないか。そこそ見ていかなければならないのではないか、という主張をしているわけです。

まさに、ダライ・ラマにせよ、ティク・ナット・ハンにせよ、現代を動かすようないろいろな人は、まさに世界というものを、仏教の縁起、そして、慈悲ということから動き出さなければならぬのではないかということを行っているわけです。

もし仏教というものが、私とは何なのかという問いを与えるだけで、それに答えるだけでいいのであれば、仏陀は人に説かなかったと思います。

お釈迦様は、自分が悟ってから、人に説き出すまでの間、タイムラグがあります。それ

は、私はわかったけれども、なぜ人に説かなければならないのかということを考えておられたわけです。

しかし、それを人に説かれたということは、この教えというものが広まることで、人々が救われるという慈悲によるものだ、と、後世の人々は言っています。

法然上人はなぜ「弥陀の本願」に気づかれて、「専修念仏」ということに気づかれたのに、ただそれだったら、自分が「南無阿弥陀仏」をお称えになるだけでよかったのに、あのように、法難を受けながらも、人にお説きになったのでしょうか。

それは、明らかに、そこには慈悲があり、そして、救いというものが、この世の中にまさにあまねく行き渡ってほしいという慈悲の心があったというふうにしかな、私には思われません。

まさに、それを救うという行動においては自力だったわけです。救うという構造においては他力であつたけれども、たくさんの方が救われてほしい。この教えに気づいてほしい。そして、まさに貧窮孤独な状況の中にあつても、生きるということ捨てないで、あきらめないでほしいという、そのことを広めたいということに関しては、大きな社会運動であつたと思います。

(つづく)

上田紀行（うえだ のりゆき）

1958年東京生まれ。東京大学大学院文化人類学専攻博士課程修了。専攻は文化人類学。現在、東京工業大学大学院助教授（社会理工学研究科・価値システム専攻）。著書に『生きる意味』（岩波新書）、『がんばれ仏教』（NHKブックス）、『癒しの時代をひらく』（法蔵館）、『宗教クライシス』（岩波書店）、『スリランカの悪魔祓い』（徳間書店）、『覚醒のネットワーク』（カタツムリ社）など。町田宗鳳と共著『生きる力としての仏教』（PHP新書）

念仏人と歴史

熊谷次郎直実



京都文教短期大学長
佛教大学名誉教授

伊藤唯真

上人も、信心堅固なる念仏の行者のため
しには、常におもひ出給て、「坂東の阿
みだほとけ」とぞ仰られける。

（『勅修御伝』二七）

武士は鎌倉時代という新世紀の開拓者であ
ったが、執敵怨類に会っては瞋恚のほむらを
燃やし、人畜のいのちを断つては罪惡をほし
いままにする「憎惡の機（人間）」であった。
この惡人たる武士に救済の手をさしのべたの
が法然上人である。「弓箭の家業をもすてず、
往生の素意をもとむる道」は専修念仏のほか
になかったから、武士の間でこの「機と教の
相応せる法門」浄土宗に帰依する者があいつ
いだ。

関東御家人（鎌倉幕府の將軍の家臣）のな
かにも、大番役（おおばんやく 宮廷の警固）などで上洛し
て法然上人に接し、熱心な専修念仏者となる
ものが出た。たとえば上野国の御家人では大
胡おほこのこ小四郎隆義、そのだ蘭田の太郎成家、下野国の

御家人では宇都宮の弥三郎頼綱、武蔵国の御
家人では甘糟あまかすの太郎忠綱、熊谷くまがいの次郎直実、なおざね
津の戸の三郎為守などである。彼らの信仰の
影響は子息、一族郎党にまで及んだ。大胡の
小四郎隆義の子息太郎実秀およびその妻室も
上人から消息による教化を得て浄土信仰に生
きた人であった（『勅修御伝』二五―二七）。
大胡の太郎、津の戸の三郎、しのやの三人は
「聖人根本の弟子」（『西方指南抄』卷下末）
とさえ云われている。

関東地方の念仏弘通にこれら在地領主たる
御家人が果した役割は大きく、法然上人もか
れらに大きな期待を寄せられていた。津の戸
の三郎が熊谷直実の支援もあつて、武蔵国内
で念仏者を三十人以上もつくったときには、
法然上人は書状をつかわし、「さても専修念
仏の人はよにありがたき事にて候に、その一
国に三十余人まで候はんこそ、まめやかにあ
はれに候へ（略）ひとへに御ちから、又くま
かやの入道なんどのからはからひにてこそ候な

れ」(『黒谷上人語燈録(和語)』第六卷(元亨版)と、専修念仏の興隆をよろこび、その労を犒っておられる。

法然上人が直接勸化し、その内容がはつきりしている教化の対象者は、特定の僧侶貴族を除けば、実は関東御家人やその出身者なのである。法然上人と武士との関係は、貴族などよりもはるかに密接であった。法然上人をとりまく数多い武士のなかで、また右にあげた関東御家人のなかでも、異色の門弟はなんといっても熊谷次郎直実であろう。そこで熊谷直実に焦点をあててみよう。

直実は、永治元年(一一四一)武蔵国大里郡熊谷郷に生まれた。法然上人より八歳若かった。早く父と死別し、おじの久下直光に養われた。剛勇の聞えがあり、平家の全盛時代に、直光に代わって京都大番役をつとめたが、傍輩に侮辱されて代役をことわり、平知盛に仕えた。直光はこれを心よく思わず、後年このことがもとで両者の対立となり、はては所

領争いともなつて、直実が隠退することにもなつたのである。源頼朝が挙兵したとき、彼は郷里に下向しており、石橋山の合戦には平家方として従軍した。しかし間もなく頼朝方に加わり、治承四年(一一八〇)十一月の常陸の佐竹秀義攻めには手柄をたて、養和二年(一一八二)五月、熊谷郷の地頭となった。寿永三年(一一八四)二月、一の谷の合戦で平敦盛を斬ったことはよく知られている。こののち幕府に出仕することが多くなつたが、宮仕えは不得手であつた。文治三年(一一八七)八月、鶴岡八幡宮放生会で行なわれた流鏑馬(騎射の一種)で的立てまことたての役を割当てられたが、射手が騎馬で的立てが歩行であるのにこだわつて頼朝の命を聞かず、所役過怠の罪で領地を削られた。この頃、五十歳の半ばに達した法然上人は大原問答で名を挙げ、専修念仏の積極的な布教をはじめられようとしていた。

法然上人が兼実公に招かれてその邸に出入

りしていた建久三年（一一九二）は、直実にとって生涯最大の転機之年であった。この年十一月二十五日、直実は頼朝から直接、直光との所領堺相論について尋問を受けた。直実はこの席上、梶原景時が直光をかばったのをののしり、頼朝の下した不利な判決を不当として『吾妻鏡』によれば自ら刀で髪を断ち、そのまま出奔したという。しかし『熊谷家文書』によればこのときすでに「地頭僧蓮生^{れんせい}」と号しているから、入道したのはこの裁判が直接の原因ではなかった。入道の原因はやはり敦盛を討ったことであろう。しかし、私宅に帰らず上京して法然上人の門下に入った直接のきっかけはこの裁判にあった。

手足をも切り命をすててこそ後世は助かるものと思っていた直実は、聖覚の手引で法然上人に初めて出会ったとき「罪の軽重をいはず、たた念仏だにも申せば往生するなり。別様のなし」（『勅修御伝』二七）と教えられて感泣した。建久五年（一一九四）彼は鎌倉に

来て頼朝に仏道、兵法を語り、そのまま留まるよう懇請した頼朝をふりきって帰京した。直実は性格が剛直であるだけに、一端信仰の火が点じられるや、その宗教的実践も熱烈で、「ふた心なき専修の行者」（同上）となった。

そして、念仏往生の信心決定してからは、ひとえに上品上生の往生の望みを持った。元久元年（一二〇四）五月十三日、彼は鳥羽において、上品上生の来迎印をもつ阿弥陀仏の曼荼羅の前で上品上生往生の願を立てた。この立願のことを述べた直実自筆の誓願文は今現に嵯峨の清涼寺に伝えられている。それによると蓮生は、われらが身にとっては下品下生でも限らない楽しみであるが、上品上生以外の往生ではふたたびこの土に生まれて衆生を極楽に導くことはできないとされている。法然上人が末代の衆生で上品上生する者は一人もないと仰有っているのをよく知っているが、弥陀の本願、三部経の文、善導の釈がある以上、同じことなら自分は上品上生を果し

て有縁はもとより無縁の者までも浄土に迎えたい、と立願している。直実が上品上生を願ったのは、死後再びこの土に生まれて念仏の悦びを有縁無縁の者に広げ、一切の人を浄土に導こうとする志が強固なためであった。

直実は上品上生を願うあまり、専修念仏から逸脱した行業に走る懸念があった。しかし法然上人から「又迎接の曼荼羅は大切におはしまし候、それも次の事に候、ただ念仏を三万もしくは五万もしくは六万、一心に申させおはしまし候はむぞ、決定往生の行ひにては候、こと（異）善根は念仏のいとまあらばの事に候」（熊谷宛上人直筆書状。清涼寺蔵。但し漢字に直した箇所あり）と、あくまで念仏を往生業の中心に据えるべきことを諭され、ますます念仏に励んで靈夢や奇瑞を感ずることもあつて、往生疑いなき確信を深めた。

直実は死期を予告した。幕府顧問の大江広元はこれを聞いて、権化の言だ、仰いで信ずべきだと云った。『吾妻鏡』は、予告通り彼

が承元二年（一二〇八）九月十四日、東山の草庵で往生したと伝える。六十八歳であった。上人に先立つこと三年半。直実の往生の様子は一ヶ月後、東平太重胤から將軍実朝にも報ぜられた。

『勅修御伝』によると承元はじめの（一二〇七）年九月四日、武蔵国村岡で上人秘蔵の迎接曼荼羅を前に高声念仏のうちに往生したという。上人は信心堅固な念仏者の手本として常に直実を思い出され、彼を「坂東の阿弥陀ほとけ」だと仰せになっていた。その上人は、彼がなくなったとき、四国配流中であつた。

大本山増上寺の三門は東京都内で最大最古の木造建造物で国の重要文化財だ。

この三門を仰いでは、あの空襲によくぞ残ったものかなと感慨しきりである。

通行人がバケツリレーで消したと、言う人がいたが虚言である。

「私の身内の者が消した」と増上寺に来ては金品を強要する人達もあった。

私は増上寺に居てその人達との対応に苦慮していたので、焼け残った真相を探っていたが、「私がその場にいた」という人に巡り合うことができた。

当時の増上寺では養老院のようなこともしていたが、火の吹く三門を見上げている老人の中に鳶職経験者がいた。

「俺がやってみよう」と駆け出し三門隣の建物に取り付き、下の屋根から漸く上の大屋根の端に登り付いた。瓦屋根の急

斜面だ。下で見守っている人達の口からお念仏が出て、大屋根まで響いていった。火は三門の棟木から出ていたが棟木は銅版で覆われていた。その銅版の上に鳩の糞が積もりそれが燃えていたのだ。

彼は軍手で擦り擦って見事に消した。

お昼屋からの飛び火らしい。闇黒の夜空だったので、大きな火に見えたのだろう。芝消防署のポンプ車が来たが水が上まで届かず消防手が悔しがったという。

どの様にして大屋根に登ったのだろうか、その方と三門の前に立って詳しい説明を受け私の疑念は晴れた。

お金をせびる人からも解放され、私はひと安堵した。

その方は北川有光師（故人）。今も感謝している。



上品上生 熊谷次郎直実 を願った男

東京大学教授(演劇史)
古井戸秀夫

歌舞伎『熊谷陣屋』

歌舞伎の「熊谷陣屋」、正式なタイトルを
いちのたにふたばぐんき
『二谷嫩軍記』といいます。主人公の熊谷次

郎直実は、明治の劇聖と称えられた名優九代目市川団十郎の当り役で初代中村吉右衛門に受け継がれました。吉右衛門は戦後亡くなるまで「熊谷陣屋」を上演し続けたので、その名調子を覚えている方もいらっしゃるのではないのでしょうか。吉右衛門の娘婿で故人の白鸚こと八代目松本幸四郎、孫に当たる現在の九代目幸四郎と二代目吉右衛門をはじめ、昭和・平成の歌舞伎を代表する座頭役者によって繰り返し上演されている歌舞伎の人気狂言です。

もともとは、江戸時代の中期、宝暦元年（一七五二）に大坂の人形芝居で初演されました。歌舞伎に移されて大輪の花を咲かせることになります。江戸時代の後期、文化文政

期の歌舞伎で活躍をした大坂の三代目中村歌右衛門、江戸の七代目団十郎、二人の工夫した演出を踏まえて明治の九代目団十郎が完成したものを団十郎型と呼んでいます。平家の公達平敦盛卿の身替りとして、倅小次郎の首を討った熊谷は世の無常を悟り、黒谷の法然上人を師と頼み出家を決意しました。幕切れに丸坊主姿になった熊谷がたったひとり花道に残り、「十六年はひと昔、ああ夢じゃ」と言って剃り立ての頭を撫でる演出も人形芝居には見られなかった歌舞伎の名優たちの工夫でした。とくに団十郎型では幕外に三味線弾きが登場し、踏み台に右足を乗せ「愁い三重」という曲を弾きます。チチチン、チン、チン：と弾かれる寂しい音色を聞いていると、熊谷の愁いに満ちた悲しさが、わたくしたち観客の胸にも沁み入るように感じます。そのとき突如として、戦場で吹かれる法螺貝の音とともに、陣太鼓の「ドドン、ジャンジャン」という激しい音が聞こえてきます。その音に

反応して、きつと身構えてしまう熊谷。いやいや、自分はもう世捨て人となって遁世を誓った身なのだと思いついても、武士の習性なのでしょう、貝がね太鼓の音がすると身構えてしまう悲しさ。熊谷次郎直実は網笠を折り曲げて耳を塞ぎ、戦場から逃れるように花道を走り去っていきます。

一方、江戸時代の古風な演出を伝えるのが「芝翫型」です。九代目団十郎の先輩格にあたる四代目中村芝翫の演出で、一昨年、現芝翫家のプリンス中村橋之助が久しぶりに「芝翫型」を復活しました。丸坊主にはならない原作どおりの「有髪の僧」の姿、「十六年はひと昔……」の幕切れの引込みもないのが「芝翫型」の特色です。陣屋の中央には源氏の御大将源義経、上手に平家方の弥陀六こと弥平兵衛宗清と敦盛の母藤の方、下手に熊谷夫婦とその郎党、三者が三様に別れのせりふを言い交わして幕になります。熊谷次郎直実という個人の孤独な内面を表現しようとする

団十郎型。芝翫型では、熊谷を追い詰めていく人間関係——主君義経から与えられた秘密の使命、かつて敦盛卿の母藤の方に命を助けられた恩、そのような人間関係の桎梏に縛られて身動きのできない状態へ追い込まれていく熊谷の姿を見せます。芝翫の熊谷は、赤地錦に金欄の袴、黒ビロードの着付けという派手な衣裳を着て登場します。芝翫の熊谷には、誇張した姿でなければ耐えられない過酷な運命が待ち受けているからでしょう。熊谷は、倅小次郎を失った悲しさだけで出家を決意したわけではありませんでした。出家を願う熊谷の真意を察した義経は、次のような言葉を熊谷に掛けます。「そもそも武士（もののふ）の高名誉れを望むも、子孫に伝えん家の面目、その伝うべき子を先立て、軍に立たん望みはあるまい」と言って、義経は熊谷に暇を与えてくれた。その言葉を聞いた熊谷は、「一念弥陀仏無量罪消、十六年もひと昔、夢であったなあ」と言って、ほろりと涙を零しました。

た。熊谷のその姿は、まるで柁に積もった初雪が日の光にあたって融けているようだと書かれています。鋸の歯のようにぎざぎざした柁の葉は、倅小次郎を敦盛卿の身替りに殺した熊谷のことを暗示しているのでしょうか。そのような柁の葉に積もった初雪が、一滴の涙のようにほろりと融けて落ちると、白い小さな花が咲いています。芳香を放つ、その花の香りを出家しようとする熊谷の決意に譬えているのではないのでしょうか。

フィクションの背景

熊谷が敦盛卿の身替りに小次郎直家の首を討ったとする物語は、『一谷嫩軍記』で創作されたフィクションでした。父の直実が出家したのちも、倅の直家は鎌倉幕府の御家人として仕えています。出家した直実は、直家をはじめとする子孫に三箇条の遺訓を残しています。冒頭の第一条には、熊谷が多くの戦場

で目覚しい働きをした「高名誉れ」を確認するものでした。軍功に抛り先祖相伝の所領を安堵するという御判を据えたお墨付の書類が七通、軍功を誉め称えられた「軍忠御感状」にいたっては二十一通を数えると言っています。江戸時代の儒者で兵法家としても知られた山鹿素行は、この遺訓を見て深い感銘を受けたと伝えられています。俗世を捨てて出家したはずの熊谷ですが、熊谷家の本領にだけは執心を残しています。山鹿素行は、その点に武士としての共感を感じ取ったようです。山鹿素行の言行を記録した『山鹿語録』には、熊谷は出家しても「士（もののふ）の志（ころざし）」だけは忘れなかった、という素行の言葉が記録されています。素行の薫陶を得た赤穂の大石内蔵助にも、そのような武士の精神は伝えられたのでしょうか。熊谷が倅小次郎を殺して出家する物語は、このような江戸時代の侍に共通する心情に支えられて生まれたものだったのだと思います。

熊谷が敦盛を討って世の無常を感じ出家する、という物語も『平家物語』によって創られたフィクションだったようです。平家の武将斎藤実盛は東国の武士と西国の武士を比べて、興味深い分析をしています。西国の武士は親が討たれたといえは供養し、子が討たれたといつては嘆き、そのあいだは軍を中断する。東国の武士は、親も討たれよ、子も討たれよ、死骸を乗り越えて戦うのだと言っています。『平家物語』「敦盛最期」の一段は、そのように死骸を乗り越えてまで戦った東国の荒武者が西国の貴公子の洗練された美しさに心を打たれ発心を決意するにいたったとする物語でした。敦盛をやむなく討ち取った熊谷の眼からは、思わず涙がひとしずく流れ落ちました。鎧の直垂で首を包もうとした熊谷は、錦の袋に入れられた一本の笛を見つけました。命がけの戦場に笛を持ち込む、やさしい心に熊谷は打たれます。義経をはじめ、この笛の物語を聞いたひとびとで涙を流さぬ人は

なかった、と書かれています。「これよりして熊谷が発心の思いはすすみける」というのが、『平家物語』が語ろうとしたフィクションの物語でした。関東武士を代表するつわもの熊谷次郎直実をも魅惑する平家の公達のやさしさ。軍では破れても、精神では滅びることがなかった平家の公達の美しさを語ろうとする、『平家物語』の姿勢が現れているように思います。

鎌倉幕府の編集した『吾妻鏡』には、熊谷が敦盛を討ち取ったという記録は残されていません。おなじ『平家物語』でも関東の武士たちに語り伝えられたとされる『源平闘諍録』では、敦盛を討ち取るのは皆輪の次郎・八郎の兄弟です。『平家物語』「敦盛最期」は、あくまでも敦盛の最期を描くことに主眼がありました。熊谷は、それを見届ける脇役でしかなかったのです。『平家物語』に取材した能『敦盛』でも、主人公のシテは草刈の青年の姿となって現れる敦盛の亡霊で、出家して蓮

生法師^{せい}となつた熊谷は文字通りワキ役でしかありませんでした。

坂東の阿弥陀ほとけ

黒谷の源空こと法然上人のもとで出家し、蓮生と名乗つた熊谷の発心の理由を『法然上人行状絵図』（「法然上人絵伝」）では、「幕下將軍を恨み申すことありて、心を起こし出家」したと婉曲的な表現で記しています。幕下將軍とは、源頼朝のことです。鎌倉幕府が編纂した『吾妻鏡』では、その間の事情が具体的に記録されています。第一の事件は、鎌倉の鶴ヶ岡八幡宮の流鏑馬の神事のおりに起こりました。源平の合戦で手柄を立てた御家人の多くが馬に乗って流鏑馬の的を射る役を仰せつかったのにもかかわらず、熊谷には流鏑馬^{やぶさめ}の的を立てる徒歩^{かち}の役目が与えられました。おなじ御家人でありながら、一方は騎馬の役、なぜ自分は徒歩の役目をしなければならない

のか、熊谷の自尊心は、それを許すことがなかったようです。役目をボイコットし、それゆえに所領の一部を没収されることになりました。決定的な事件は、そのあとに起こりました。親族の久下直光との所領争いになり、頼朝公の御前で弁明を求められた熊谷は潔しとせず、みずから髻を切つて出奔したと記録されています。この事件が、熊谷次郎直実の出家の原因だったと考えるのが妥当ではないでしょうか。

黒谷の法然上人のもとで出家した蓮生こと熊谷は、上品上生を願ひ、その願いどおり上品上生の成仏を果たした男として語り継がれてきました。臨終の際に阿弥陀さまがお迎えに来る来迎^{らいこう}には、上品^{じょうほん}・中品^{ちゅうほん}・下品^{げほん}の三品、それぞれに上生^{じょうしょう}・中生^{ちゅうしょう}・下生の三生があることを蓮生は学びます。上品上生でなければ、成仏したのちひとびとを救うために帰ってくることはできないと知った蓮生は、上品上生の来迎を強く望みました。蓮生の大望を笑う

古き伝統技 三代にわたる信頼

浄土宗法衣専門

有限
会社

古島法衣店

〒111東京都台東区元浅草4の2の1

電話(03)3842-1289

振替00180-2-45231

ひとびとのなかで、法然上人は、ただひたすらに西方に向かい念仏を唱えなさいと教えています。その教えを頑なに守ろうとして熊谷は、京から関東に下る馬上でも、西を向いて念仏を唱えるために馬の背に後ろ向きになって乗り続けたと伝えられます。「浄土にも剛の者とや沙汰すらん、西に向かい後ろ見せ

ねば」という歌は、そのおりに熊谷が読んだ歌です。そのような蓮生の心がけを見て、法然上人は熊谷のことを「坂東の阿弥陀ほとけ」と仰せられました。『法然上人行状絵図』には、熊谷が望みどおり上品上生の来迎を遂げる姿が語られています。

曲説

直実

異聞

佐々木美冬



念仏者蓮生Ⅱ熊谷直実は承元二（一二一〇）年、六十七年に涉った波乱の生涯を終えた。すなわち今年は直実の八百年遠忌にあたるが、大方の記述は来年を八〇〇年と書く。「満」で数えているのである。回忌は「数え」で数えるべきで、たとえば今年の一大イベントとなったモーツァルト生誕二五〇年などと一緒にするべきではない。

直実は往生の予告などという派手なことが大好きで、本当は半年ほど早く死ぬ予定だった。一度、現在の熊谷市村岡のあたりに高札を掲げたのに果たせず、夏を越して九月十四日、最予告してようやく見事に念仏往生した。気性の激しい男で、捕らえた犯罪者に馬の飼い葉桶をかぶせたり、簀巻きにしたり、念仏に熱心でない者を縛ったりした。法然上人が勢観房源智に与えた大事な金色の名号を奪い取ったりもしたため、法然上人は、時には怠状を出させたりして、きつく譴責せざるを得なかった。だが、直実はかえってそれを望外の喜びとした。師に怒られることで愛情を確認するのである。実に厄介な男だ。

などということ、近所の呑み屋で友人と

酔談していると、その店のママ（三十二歳）が乗り出して来て、熊谷市の出身だという。熊谷には「直実節（ぶし）」という踊りがあるって、小学校中学校の生徒はそれをみな踊るというのである。「秩父の峰も」という歌詞で始まるが、例の「一の谷のいくさ敗れ」で始まる名曲「青葉の笛」が間に挟まるというから、明らかにあの直実ゆかりの踊りである。熊谷駅前には馬上の直実の像があり、二十歳の成人式の帰り、酔っ払ってそれに登ったはいいが、怖くて降りられなくなってしまうって、わんわん泣いたことがある、というママの話から、熊谷市民にとっては、いまでもたいへん身近で親しい存在なのだということがよくわかった。

ところで、ちよつといいお香を求めようとしたり、なにか大事な知人に気の利いた贈り物をしようと思ったとき、東京なら銀座四丁目の和文具、香道具の鳩居堂を思い浮かべる人は多いだろう。京都に本店がある老舗中の老舗。この鳩居堂は熊谷直実と縁が深い。

直実から数えて二十代目、熊谷直心（じきしん）という末裔があった。この人が京都寺

町の本能寺門前に、薬種商「鳩居堂」を始めたのである。屋号は儒学者・室鳩巢（むろきゆうそう）の命名。屋号の由来は『詩経』の召南の篇にある「維鵲巢有、維鳩居之」で、鳩は鵲（かささぎ）の巢に託卵する。すなわち「店はお客様のもの」という謙譲の意を込めたものという。はて託卵。郭公や時鳥、筒鳥ではなく鳩。不思議な話である。むしろ「鳩」の字は、室鳩巢という雅号にあり、そして熊谷家の家紋「向かい鳩」にもあり、まさに何処にでも「鳩が居る」ことによる命名と考えたほうが自然である。この時、寛文三（二六六三）年。

そういえば頼朝挙兵の治承四（一一八〇）年、石橋山の戦いで頼朝の逃走を助けた軍功によって、直実は「向かい鳩」の家紋を賜った。二年後、常陸の佐竹氏討伐の実績で熊谷郷を安堵された。

元来が武蔵七党のなかの、私市（きさい）党あるいは丹（たん）党の庶流の出。屈強の関東武者として頼朝の信頼は厚かったが、口下手、直情。平氏討伐が一段落したのち、鶴岡八幡宮の流鏑馬の役配を不服として出仕せ

ず所領の一部を没収される。育ての親であり叔父の家でもある久下氏との境界論争でうまく弁明できず、不利な採決が下ると証拠書類を投げ捨て、その場で鬚を切り落とし、行方不明となった。

法然上人に帰依していた関東武者は多く、武蔵七党は猪俣党の甘糟忠綱、あるいは国立あたりの出身の尊願・津戸三郎や伊豆走湯山の尼僧妙真などの伝手もあったのか、聖覚、澄憲等の案内で法然上人に帰依し、門流中、最も勇ましい念仏者となった。

法名は、法力房蓮生^{れんせい}。晩年は熊谷入道と称した。

墓は熊谷市の熊谷寺（ゆうこくじ）にあり、開山忌が催される。直実ゆかりの寺院としては、烏寺といわれる専定寺、あるいは尼寺の宝樹寺に蓮生の木像がある。

蓮生開山といわれる寺は多く、法然上人の生地岡山県久米南町の誕生寺、京都府長岡町の西山浄土宗総本山粟生光明寺、兵庫県日高町の蓮生寺、静岡県藤枝市の蓮生寺、京都市の一念寺や法然寺、長野市の仏導寺や蓮生寺、高野山の熊谷寺、中興したという岐阜県谷汲

村の横蔵寺等々。

また、直実の像の傍には敦盛の像が併置されていることが多く、平家物語の一の谷の涙の一件が、広く人口に膾炙されていることがわかる。

直実と敦盛といえは、蘭の一種にクマガイソウとアツモリソウの名がある。茎も葉もまるで違うが、ともに球形で袋状の花をつける。誰がこんな風雅な名を付けたかは不明だが、その袋状の花が母衣（ほろ）に似ているため、という。母衣とは、往時の武者が馬上流れ矢を防ぐために背に着けた布の軍装である。それが風を孕んだところに似ているため、というのである。荒武者熊谷草の花は緑。若武者敦盛草の花は赤。

浄土にも剛の者とや沙汰すらん

西に向いて後見せねば

法然上人のもとをしばし離れ東海道を東へ下る際、直実にとっての西方浄土、つまり法然上人に背を向けては礼を失するとの思いから、馬に逆向きに乗り続けた蓮生作の和歌が新和歌集五百十九首の中に残っている。

連載

会いたい人 関 容子



撮影／タカオカ邦彦

五十嵐夫妻がイタリアに渡って二年目の夏、ローマで女の赤ちゃんが生まれた。それがソプラノ歌手の五十嵐麻利江さん。

「家内がおなかが痛いと言い出して、夕方、アングロ・アメリカーナというクリニックに連れて行ったら、今夜は生まれないからと言われて、帰って寝ちやった。で、翌日寝坊して昼近くに行くと、もう生まれてて、家内からこれは生涯言われそうです（笑）。とにかくイタリア人というのは何事も大らかなのか、よその夫婦を見てると、お前のせいでこんなに痛い目に遭ってる、なんて前の晩に夫を責めてた奥さんが、翌日行ってみると幸せそうにチューチューチューチュー」

直代さんが続ける。

「日本ではまだ産後の食事はおかゆと梅干、といった時代に、いきなりトリのローストとワインが出てきてびっくりしました。だいたいの向うの新生児は六キロくらいもあって、日本の赤ん坊の約倍はあるんですから、欧米の

人の体格は生まれるときから違ってるんですよ。いい声が出るのも当然だわ」

麻利江という名は、マリア・カラスにあやかっつて、というのを昔何かの記事で読んだ気がするが、違うとのこと。

「世界に共通する呼びやすい名前、ということですよ。イタリアでは女はマリア、男ならマリオというのが最もポピュラーで、まあ花子と太郎みたいなもの。それでマリアじゃそのまますぎるから、麻利江としたわけです」

イタリアでは女の名はア、で、男の名はオで終る。普通名詞でもバンピーナは女の子、バンピーノは男の子のこと。だから『ロメオとジュリエット』では二人とも男ということになる、とずっと以前に五十嵐さんから聞いたことがある。なるほどヴェローナの観光名所は「ジュリエッタの家」だ。

「マリア・カラスは舞台姿が美しくて、日本では圧倒的な人気だけど、本当のベル・カン（唱法）を学んだ人じゃないですからね。

娘の麻利江さんとの一枚。麻利江さんは昭和音大でオペラを教えている



しかしマリア・カラスの素晴しさは、いろいろの音色おんしきの声を出すことができたこと。それで大指揮者のセラフィンが、そのオペラに合う声を彼女に要求したけど、カラスは類い稀な才能の持ち主だったからそれに応えられたんですね。歌い手側には、オペラをよく知っていて、声のことがよくわかる耳を持つ人がいなくてはならない、ということだと思えますよ。

それでもイタリア人はベル・カント信奉者が多いですから、完璧な歌唱法を身につけているテバルディの人氣が結構高くて、ミラノ・スカラ座なんかにはマリア・カラスの歌唱

に何かあつたら、と身構えて聴いてるマニアがかなりいる。舞台に真つ赤なトマトを投げつけて、カラスを引っこませた話は有名で、向うのお客は厳しいです。それが有難いとも言えるけど」

ベル・カント（美しい歌唱法の意）は、十八世紀から十九世紀初頭にかけてイタリアで極められた。

「しかしベル・カントがロッシーニ、ベツリーニ、ドニゼッティの時代だけのもの、と思つたら大間違いですよ。テバルディはベル・カントで徹底的に歌曲を勉強したからこそ、オペラがあんなに歌えた。ぼくは近ごろ名歌手と言われる人たちがどういう成長のし方をしてきたか、ということに興味があつて、テバルディの歌曲のCDをよくよく聴いてみると、ベツリーニなんてたまらないほどうまくですよ。パバロッティにしても、若いころの歌曲は繊細で実に美しいですしね」

夫妻は生後四十日の麻利江さんを伴い、昭和三十四年八月に帰国。すると、全国各地のリサイタルは目白押しで、都民劇場主催のオペラも『マノン』『リゴレット』『ルチア』と立て続けだった。

「あまりの過密スケジュールにほとんど家にも帰れず、自分を見失いそうになって、一家でまたイタリアへ行つたのが昭和三十七年一月です。麻利江はまだ三つやそこらなのにオペラのアリアなんかをすぐ憶えて歌つてね。ローマの今度のアパートの近くにソプラノの山口和子さんが住んでて、この方が一時帰国中にぼくと『ルチア』で共演したものだから、麻利江を可愛がつてくれていろんな歌を教えこむ。それこそ『ルチア』狂乱の場の難しいアリアなんかも歌ってましたよ」

五十嵐さんは将来もしこの子が歌い手になったら、『椿姫』など同じ舞台に立ちたいものだ、と考えはしなかったか。

「でもぼくの先生のティート・スキーパーが娘

テレビドラマ「コメットさん」に出演していた五十嵐さん。右は真屋順子さん。左は大場久美子さん



五十嵐さんの奥様、直代さん(右)と筆者の関容子さん。
1987年、イタリアのペローナでの一枚

さんとオペラをやって、観た人はあまり感動しなかったそうですし、親子というのはお互いに気を使いすぎるし、観るほうも恋人役が親子じやのめりこめないと思うし。それで将来の夢は父と娘のコンサート、くらいがちょうどいいかと思つてね」

五十嵐さんは二度目のイタリアからは一年で帰国。再び超多忙の生活に戻った。

実はそのころの五十嵐夫妻と、私は偶然同じ列車に乗り合せたことがあつた。普通よりは多少高めの咳払いの連発が気になって、振り向くと話題のテノールなのでびつくりした。

あの咳払いについて、直代さんが言う。

「当時は年間百五十回以上も演奏活動があつて、声がくたびれるものですから、家ではしゃべらないし、機嫌はよくないし、かなり神経質でしたね。咳払いをするのは、声に響きがつけられるかどうか、声が思う場所に当るかどうか、絶えず気にして試してるんです。

私も麻利江もあのころは結構主人に気を使つたものですよ。今は全然（笑）」

雑誌記者だった私は、その後何かと理由をつけては五十嵐夫妻の取材を重ね、仕事を離れても親しくお会いするようになった。麻利江さんとのデュオ・コンサートの夢も、折にふれて形を変えてくるようで、私にとつても気にかかる課題みたいに思えてきた。

直代さんが続ける。

「麻利江は幼稚園（田園調布の名門雙葉）のころからトスカゴッつこやカルメンゴッつこ。つきあわされる友だちこそいい迷惑で、幕引きとかいろいろさせられていましたね。桐朋学園の声楽科に進むころは、それまであんまりクラシックにどっぷりだったせいか、ニューミュージックに興味が移つて、テレビ番組の司会とか、ちよつと違う方向へ行きかけたんです。でも七年間で心機一転。ミラノへ音楽の勉強に行くことになって」

麻利江さんの先生はソプラノの林康子さん

の恩師、グアリーニさん。もう老婦人だが、

歌唱指導は一流だった。五十嵐さんによれば、歌はまず言葉が大切で、イタリア語の美しさとメロディの美しさが渾然一体となり、一つに溶け合うのがベル・カントなのだという。

「ええ、林康子さんとか、若くして亡くなった渡辺葉子さんとか、ミラノ・スカラ座でタイトル・ロールが歌えるようなプリマドンナには、それぞれにイタリア人の歌い手の旦那さんがいて、発音がおかしいといちいち注意する。横にうるさい先生がつきつきりなわけだから、いい歌い手になるわけですよ」

麻利江さんは帰国後、オペラ歌手としてデビュー。『夢遊病の女』のリーザ（アミーナ役はアリベルティ）、『ラ・ボエーム』のムゼッタ（ミミ役はフレーニ）などは素晴らしいキヤリアと言える。

五十嵐さんのオペラ歌手としての全盛時代は、昭和四、五十年代の『カルメン』『エデ

イプス王』『トスカ』『マノン』『リゴレット』

『椿姫』『ファウスト』『仮面舞踏会』『ルチア』

『ドン・パスクワレ』『セヴィリアの理髪師』

『愛の妙薬』『友人フリッツ』『真珠採り』（こ

れが素晴しかった！）と枚挙にいとまがないが、昭和六十年には藤原歌劇団の総監督に就任し、その後は新国立劇場の芸術監督を二期つとめる。この時代の五十嵐さんの二大成果として、オペラ原語上演に伴う字幕スーパの導入（オペラが身近になる）、上演前の演目解説（ときどきちよつと歌ってくれた）が挙げられる。これで日本のオペラ愛好者がぐんと増えた。

現在は昭和音楽大学学長で、麻利江さんもコンサート活動の傍ら、同じ音大のオペラ科で教えている。

さて、五十嵐さんは今年めでたく喜寿を迎え、その記念コンサート、藤原歌劇団の中堅七人による「テノールの饗宴」が、九月に開かれた。会場のパースモンホールは自由席だ

ったが、友人が先に行って最前列中央差し向いの席を取っておいてくれた。

麻利江さんの軽妙な司会に笑わされながら、客席の背にもたれ、耳なれたテノールの名曲の数々に聴き入っていたら、これまでの五十嵐家との交流の場面が次々と思い浮んできた。

中でも忘れられないのは、平成二年夏、ローマのバルベリー二宮殿（『ローマの休日』のヘップバーン王女宿舎の舞台）で開かれた第一回「父と娘のデュオ・コンサート」への追っかけ。それぞれが歌曲、カンツォーネ、オペラ・アリアと歌い進み、最後に麻利江さんの『椿姫』第一幕終盤のアリアになって「花から花へ」にさしかかると、舞台の陰で歌う五十嵐さんのアルフレードの声が不意を突くように私の耳を打ち、ああ、永年の夢が今形になったのだ、と感激して、涙が止まらなくなっただけ。

あれから十六年……とぼんやり指折り数え

ていたなら、今宵の主役五十嵐さんの登場となった。ピアノの前のスツとした立ち姿からして品格がある。

「すみれ」「可愛い口許」の二曲を聴いた。聴きながら、人間の声というものがどんなに深く人の心にしみ入るものか、どんなに強く人の心をつかむものか、改めてまた実感した。アンコールに応えた三曲目はしみじみとした「落葉松」（作詞野上彰、作曲小林秀雄）だった。

落葉松の秋の雨に私の手が濡れる

落葉松の夜の雨に私の心が濡れる

落葉松の日のある雨に私の思い出が濡れる

落葉松の小鳥の雨に私の乾いた眼が濡れる……

る……

言葉とメロディが美しく溶け合い、そこに私のさまざまな感慨が混じり合って、幸せなあたたかい涙が溢れてきた。

歌い手ってすごい、と思う。

（おわり）

念仏を修^しせんところは、貴賤^{きせん}を論ぜず、海人^{あま}漁人^{すなどり}がとまやまでも、みなこれ予^わが遺跡^{ゆいせき}なるべしとぞおおせられける。

〔御遺跡につき法蓮坊に示されける御詞〕

お念仏の声することろは、たとえ身分の高い低いにかかわらず、海人や漁師などが使う簡単な小屋にいたるまで、どこもみな私の遺跡となるのです。

祈りの真実

某紙上で、各地の法然上人の遺跡を訪ねる連載企画を担当している。取材をはじめから足掛け四年、五十箇所近くをめぐってきた。住職からお話をうかがい、関係する仏像や絵画、墓塔などを撮影させていただく。事前に書物などである程度の情報は詰め込んでいくのだが、実際に耳にし、目にすると、伝記に記されている上人の生涯、ひととなり以上の、「もうひとつの」ともいうべきお顔、生のお姿を間近に拝したようで、深くあたたかな感慨に包まれる。そのたびに新しい発見がある。

四国では、それがひとしおだった。七十五歳の上人が、弟子の起こした不祥事の責任をとるかたちで配流された香川県に、二度取材に行った。

一度目は今年の春、上人が、京都から瀬戸内沿岸を大阪、兵庫を経由して香川・塩飽諸島の一つ大島へと、小船に揺られて渡ったのとはほぼ時期を同じくしていた。七九九年前の「そのとき、その場所」にタイムスリップを果たしたかのように思われた。

大島は丸亀港から真北（岡山方向）へ小型フェリーで三十分ほどのところに浮かぶ、周囲十六キロほどの島。ここには、上人が布教された場所に後世開かれた浄土宗寺院二カ寺のほか、真言宗寺院一カ寺が遺跡寺院としての長い歴史をひっそりと、しかし確実に刻み続けていた。過疎化が進み、住職不在の寺院

となつてはいるが、変わることもない檀信徒の篤い信仰心がそれを支えているのである。各寺院で我々取材班の到着を笑顔で迎えてくださり、そして興味深いお話をしてくださった方々の真摯な志には、ただただ敬服するばかりだった。二度目の香川取材となった八月下旬には、高松市や仲多度郡まんのう町にある数カ寺のほか、点在する遺跡、神社など数箇所を訪ねた。

寺院以外の遺跡の中、たとえば香川郡香南町の田園地区には「熊谷蓮生坊の住居跡」と伝わる、三畳ほどの小堂がある。「香川の地に蓮生坊の：」などと感嘆しつつお参りをしていると、ここを管理されているという、すぐそばに住む酪農家のご夫婦がお茶を持ってきてくださった。熱心な信者により講が結ばれ、定例の念仏会が開かれており、お堂も講員の寄進で建てられたという。「講員は減ってはいますが、私が生きている限りは護り続けます」との言葉に、思わず頭が下がった。

菅原道真公を祀る綾歌郡綾南町の滝宮天満宮には、上人の振り付けと伝わる念仏踊りが残っている。国の重要無形文化財にも指定され、毎年八月二十五日に盛大に行われている。ちょうど取材最終日、躍動感あふれるこの踊りを観ることができた。

同町の細い農道脇に、頭を垂れた稲穂に包まれるようにしてたたずんでいた

「亡霊済度の経塚」は、女人の亡霊に悩まされているとの村人からの相談をうけた上人が、川から小石を集めさせ、その一つ一つに浄土三部経の経文を一文字ずつ書かれ、これを塚として供養したところ、亡霊は成仏、以後現れることがなくなったという言い伝えを持っている。こうした民間伝承をもつ遺跡はただほかにもあるという。

驚き、そして感激したのは、今回訪れた遺跡はどこも質素ではあるが、きれいに清掃がゆきとどき、香炉などが具えられ、みずみずしい花が生けられている、ということだった。もちろん、寺院以外是我々が取材に行くことなど誰にも連絡してはいない。否、誰に連絡すればよいかすらわかっていなかった、と言うのが正しい。

なんとかして史実との整合性をつけようとする行為は、こうしたところでは必要とされていないようだ。近隣の人々をはじめとする熱心な信者方が、お念仏の灯を絶やすことなく護り続けておられるというその事実が、史実をも越えた、「祈りの真実」をまざまざと見せつけている。

黄金色の稲田をわたる風が汗ばんだ肌に心地よい。漂うお線香の香りは、そのまま法然上人のお念仏の声となった。

(小村 正孝)

袖山榮眞 SCREEN

シネマ随想

奇跡の朝

監督
ロバン・カンピョ



9月23日よりユーロスペースにてロードショー中

外国映画が本国よりも、かなり遅れて「本邦初公開」されるのが、ごく普通だった往時はさておき、二〇〇四年「ヴェネチア国際映画祭正式出品」作が、今ごろ封切りされるのには何かワケがありそうだ……このような下衆の勘ぐりを誘われるのも原題『レ・ルヴナ』とは「この世に戻って来た人々」つまり「黄泉がえり」にほかならないからだ。

二〇〇三年正月いらいロングランを記録し、年間興行ランキング第四位という赫々たる実績を誇る、塩田明彦監督『黄泉がえり』の直後とあっては、いかなる自信作といえども「柳の下で泥鰌」視を免れなかっただろう。現に三年を経た今日に至るも、塩田作品との対比から筆を起さざるを得ないのだから。『ぴあシネマクラブ』の「三週間だけ甦った死者と家族の再会と別れの情景を、多彩なエピソードを効果的に配しながら綴る」との要約とは裏腹に、草薙剛、竹内結子、伊勢谷友介のトリオと、哀川翔、石田ゆり子、山本圭

壱のトリオに東新良和をからませた四人組による二つのプロットに比べて、綺羅星の如き多彩なキャストによって演じられる、他のエピソード群は、柴咲コウの野外ライブのインパクトを唯一の例外として、必ずしも「效果的に配」されているとはいえぬ、散漫な構成であつたのに対して、明確、鮮明な三つのプロットが、常に全体との緊張感を保ちつつ、着実な展開を示すのが『奇跡の朝』である。

「明晰でないものはフランス的でない」との古諺のとおり、一万三千人と市役所によって公表される「黄泉がえり」たちの中から、メイン・キャラクターとして選ばれる三人の年齢は、六歳、たぶん三十歳前後、たぶん七十年代後半と、截然たる配分である。六歳のシルヴァンと両親、青年マチウと恋人ラシエル、老婦人マルタと夫である「市長」とその家族、「黄泉がえり」と生者との間に生まれる三組の「私的」エピソード群が、この異常事態の対処に第一線に立つ「公人」としての市長が

把握する最新情報と、精確に対応しつつ三組のプロットとして組立てられて行く手際を体感するだけでも、「柳の下……」の偏見を一掃するのに充分である。

冒頭「オ・エ・クール」なる製作会社のロゴの直後、「サン・ルイ霊園」表門から陸続と連なる「黄泉がえり」たちの徐やかな行進に始まり、カタストロフといえは磁石に引き寄せられる無数の鉄粉ながら、地下道入口に収斂して行く彼らの、ためらいを知らぬ速歩を鳥瞰する、カメラ・ワークの冴え！あの『ジュラシック・パーク』で、ハンター恐竜ヴェラキラプトルの幼生たちが、軍隊の隊列の如き位置関係を保ちつつ、同一方向に進み続ける無気味なシーンを連想させる、当事者の与り知らぬ目に見えぬ不思議なエネルギーの存在が実感されるのだが、ヴェラキラプトルにおいては「渡りの本能」と憶測され、梶尾真治原作『黄泉がえり』では或る宇宙的生命体「彼」の存在自体とされ、映画では山

中に突如出現したクレーターとの関連が、科学的に裏付けられている、このエネルギーの根源が、明晰である筈の『奇跡の朝』においては、なぜか明かされていない。

閉じられたドアを一時間以上も叩き続けた揚句の果、二階のヴェランダから身を投げる六歳の少年、豪邸の石塀に梯子を掛け脱出に成功した老婦人、同じ衝動に駆られて目的地に急ぐ、引き潮の如き人の浪に逆らってラシエルにメッセージを伝えようと、再び戻って来るマチウの行動は、たとえ一時的にせよ、あのエネルギーの呪縛から彼が解放放たれていることを示し、かれの告白によってラシエルが長い「生ける屍」の生活から解放されるあたりに、浄土教において阿弥陀如来の大慈悲による洗鍊を経て、やがて「還相回向」に昇華を遂げる、原エネルギーの如きものの存在が垣間見られる、と思うのだが……。

例によって蛇足を四本。

一、「還相回向」の一例が、文豪にして大念仏者、佐藤春夫氏の短篇「永く相おもふ——或は「ゆめみるひと」」に記録されている。かれが恩師と愛慕してやまない与謝野晶子さんが、七回忌を経て間もないころ「われひとり穢土に遊びぬ なかなか浄土にまさる思ひ出のため」の一首を直授したとの物語である。この、久しくフィクションと信じられていたエピソードが、事実であるとの証言を当事者の一人から引出したのは、『日本の鷲——堀口大学聞書き』の著者、関容子さんのお手柄であった。

二、『南伝大蔵経』『相応部』の「諸天相応」などに登場するインドの神々が、坐っておいでになる釈尊の傍らに、立ったままで質問するのはなぜか？ という疑問に対して大註釈者ブッダゴーサは「すばやく立ち去りたいと

思っていたからである。……人間界は悪臭がするので厭わしいので……任務を果たして、はやく立ち去りたいと思っていたので」と説明している。浄土から還来なさる「往生人」たちにとっても事情は同一であろう。このかたがたは恒に遙かに護念しつつも、具体的な「還相回向」は短めに切上げたくて、いらっしやるに違いあるまい。「送り盆」が設定されるゆえんである。

三、一五六一年八月十七日付のイエズス会布教報告書に活写される孟蘭盆会の習俗の中に、「送り盆の夜、家に帰ると屋根の上に多くの石を投げる」それは「去ることを欲せず、屋上に留るものあらんを恐れ、これを逐はんがため」だと記されている。前項の記述の如く「長居は無用」のはずの祖霊の中にも、未練がましいかたもおられるらしい。いっぽう娑婆の子孫にとっても「いつまでも居られては迷惑だ」と思われるようなタイプの、いわ

ば「無神経な」「黄泉がえり」たちの存在を、実感することができるとも、「奇跡の朝」の余録の一つであろう。

四、これは文字どおりの蛇足かもしれないし、我が身の無知を天下に曝すことにもなるうが、この機会に小説『黄泉がえり』を読んで初めて、「蘇り」が「黄泉がえり」から転化した言葉であり、小説及び映画の題名は「造言海」などではないことを知った。大槻の「大言海」らしい由緒正しき国語辞典は、こぞつて「蘇る」の語源として「黄泉^{よみ}から帰ること」を掲げている。

(長野・十念寺住職)





FORUM

浄土の広場

「浄土の広場」では

読者の自由な参加をお待ちしています。

詩、エッセイ、短歌、俳句、川柳、書評、映画評、

TVウォッチング、紀行文、その他創作等。

あるいは会員各寺院での催しの告知、報告など。

どしどし編集部にお寄せ下さい。

浄土誌上句会

●雨

〔特選〕梅雨湿り画鋏の錆びし掲示板

浜口 佳春

雨期である。じめじめした日が続く。そんな時、掲示板の画鋏の錆びているのが目に入った。この頃粘着性のもので止めることが多くなったから、隅のほうに残っているものだろうか。錆が見付けどころである。

〔佳作〕梅雨めくやホテルの裏の急梯子

中島富士子

雨足の遠くなりけり花八手

河合富美枝

五月雨や一字の撥ねにこだわりぬ

伊藤寿美子

●絵

〔特選〕ひとりでに止まりし絵筆目借り時

天野 淑子

一心に絵筆を持つ。どの辺まではかどったのだらう。睡魔に襲われてふと筆が止まってしまった。大きく伸びをしてまた描き続けよ

うか、もう筆を置いて寝ようか。「蛙の目借り時」のひとつこまである。

〔佳作〕お見舞いは絵本と決めて夜の秋

新島 朱里

絵の道具並べて決の日の盛り

増田 信子

丹念に薔薇描く絵筆夜のしじま

石原 新

●自由題

〔特選〕色眼鏡かけて丸出し島言葉

寺下 忠至

島に育って島で働いているのである。漁師
だったら天候によって休みになる。そういう
外出だろう。一張羅を着込んで靴はぴかぴか、
それに色眼鏡を掛ければもう立派なものであ
る。もちろん島言葉は丸出した。

〔佳作〕犬抱いて獣医に向かう台風裡

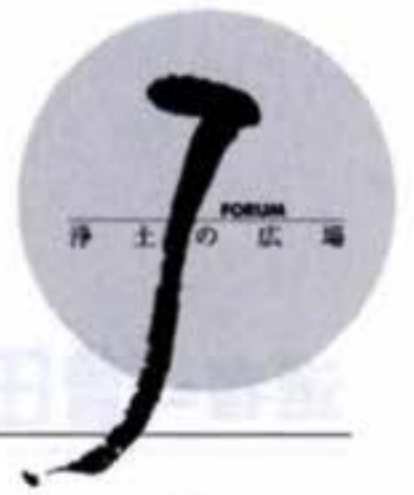
市原 凜

捨てられぬ百円の傘梅雨に入る

東 保

菖蒲園尻を並べて草取り女

野村 昭輝



浄土誌上句会のお知らせ

兼題

大根

露

自由題

雨

双つ子のボール蹴る音雨あがり 佐藤 雅子

雨来ると蛙鳴きだす里昏れて 増田 信子

雨続き所在なき日や髪洗う 大角 恭子

雨蛙草裏に潜み静まりぬ 山口 信子

絵

甦る武者絵幾枚夏祭 中島富士子

五月富士影絵の如く暮れにけり 河合富美枝

涅槃の絵に猫捜しをり幼な児ら 佐藤 雅子

締切・二〇〇六年十月二十日

発表・『浄土』二〇〇六年十二月号

選者・増田河郎子（『南風』主宰）

応募方法

●いずれの題とも数の制限はありません。

●特選各1名・佳作各3名

●葉書に俳句（何句でも可）と、住所・氏名を必ずお書き下さい。

宛先

〒105-0011 東京都港区芝公園4-7-4 明照会館内

月刊『浄土』誌上句会係

絵の道具並べて浜の日の盛り 増田 信子

方眼に絵の構図画く雪解川 井村 善也

丹念に薔薇描く絵筆夜のしじま 石原 新

自由題

雨蛙夜通し鳴きて想ふこと 佐藤 雅子

裏返る下駄占いや梅雨じめり 河合富美枝

長生きをせよと子が言ふ豆の飯 中島富士子

つくばいに苔の花咲く寺の庭 山口 信子

竹とんぼくると巡る雲の峰 井村 善也

箱階段取手を鳴らす夏衣 増田 信子

夕立や地下街へ人押込めぬ 浜口 佳春

御木曳の法被に纏う青田風 蘭田 郁子

じゃがいもの花の紫風の蝶 吉崎美和子

沖あいに湧く雲夏の色を成す 池田 伊吹

順風に船足軽きヨットかな 西井 正

さっちゃんね



34 かい目

かまちのりょう



編集後記

日入りし後雲間に寄せる秋思かな 岱潤

八月の末、冥王星が惑星から除外されたというニュースが飛び込んできた。

「水金地火木土天海冥」と覚えてきた惑星が八つになり、「冥」が消える。これから冥王星は「矮惑星」になるという。教科書で習ったこと、今まで常識として覚えてきたことが、会議での多数決で替わってしまう様を見たとき、何かとても寂々たる気持ちになった。我々の持っている知識や常識なんて、所詮この程度のものなのだろうなと思えてきたのである。特に歴史的認識などというものは、その時の権力者による政治的思惑などが絡み、教科書で習ったことが真実ではない

ことが後でわかったりすると、悲しい気分にはなる。

埼玉県熊谷の熊谷寺では、今月二十四日に熊谷直実の八〇〇回忌遠忌法要をとめる。法然上人より五年も早く往生された直実（蓮生）について、今号では三本の特集記事を掲載した。

直実は再度此の土に生まれてきた時に、多くの人に念仏の教えを伝えたいという一途の思いから、上品上生を強く願ったといわれている。直実は自らの反省をバネに願いに生きた人だった。

武士を棄てた直実は、国ではなく人を愛し、願いに生きる美しさを、私たちに教えてくれている。
(長)

編集チーフ
編集スタッフ

長谷川岱潤

斎藤晃道

佐山哲郎

青木照憲

村田洋一

編集顧問

大室了皓

浄土

七十二巻十月号 頒価六百円
年会費六千円

昭和十年五月二十日第三種郵便物認可

印刷 平成十八年 九月二十日
発行 平成十八年 十月一日

発行人 真野龍海

編集人 佐藤良純

印刷所 株式会社 シーティーイー

〒一〇五・〇〇一一

東京都港区芝公園四・七、四明照会館内

発行所 法然上人鑽仰会

電話 〇三(三五七八)六九四七
FAX 〇三(三五七八)七〇三六
振替 〇〇一八〇・八・八二八七

雑誌『浄土』
特別、維持、賛助会員の方々
飯田実雄(駒ヶ根・安楽寺)
巖谷勝正(目黒・祐天寺)
江口定信(浦安・大蓮寺)
大江田博導(仙台・西方寺)
大田秀三(大本山・清浄華院)
北山大超(焼津・光心寺)
熊谷靖彦(佐賀・本應寺)
桑原恒久(川越・蓮馨寺)
佐藤孝雄(鎌倉・高德院)
佐藤成順(品川・願行寺)
佐藤良純(小石川・光圓寺)
東海林良雲(塩釜・雲上寺)
須藤隆仙(函館・称名寺)
袖山榮真(長野・十念寺)
高口恭行(大阪・一心寺)
田中光成(町田・養運寺)
中島真成(青山・梅窓院)
中村康雅(清水・実相寺)
中村眞道(仙台・愚鈍院)
野上智徳(静岡・宝台院)
樋口隆信(石巻・西光寺)
藤田得三(鴻巣・勝願寺)
堀田卓爾(静岡・華陽院)
本多義敬(両国・回向院)
真野龍海(芝・天光院)
脳博之(網代・教安寺)
水科善隆(長野・寛慶寺)
宮林昭彦(大本山・光明寺)
宮林雄彦(横浜・大光院)
山田和雄(諏訪・貞松院)
(敬称略・五十音順)

ホームページ <http://gekkkan-jodo.info>

月刊 浄土 800 号記念事業



法然上人鑽仰会のホームページご紹介

法然上人鑽仰会の機関誌月刊『浄土』は会員の皆様方のお力添えで今年の2/3月合併号で通巻800号を迎えました。執筆に携わっていただいた先達善知識は1700名を超えております。

鑽仰会ではこれら創刊号から現在に至る月刊『浄土』800冊以上、総35000ページあまりの貴重な財産をPDF化しインターネットを通して全国の会員の皆様に自由にお読みいただけますように準備しております。現在400冊ほどがお読みいただけます。

効果的な使用方法といたしましては「<http://gekkan-jodo.info>」にアクセスし、月刊『浄土』検索から目次検索で氏名やタイトル名で検索し、表示された検索結果から読みたい『浄土』を選択すれば目次一覧がでてきます。そのページの表紙下部の「>>PDF」をクリックすればPDFファイルが表示されます。お読みいただくにはPDFビューアなどのアプリケーションが必要です。詳しくは、月刊『浄土』PDF一覧「<http://pdf.gekkan-jodo.info>」をご覧ください。

これを機会にお近くの一人でも多くの方々に月刊『浄土』をお勧めいただき、法然上人鑽仰会の会員にご勧誘いただければ甚だ幸いに存じます。

法然上人鑽仰会スタッフ一同

法然上人鑽仰会の

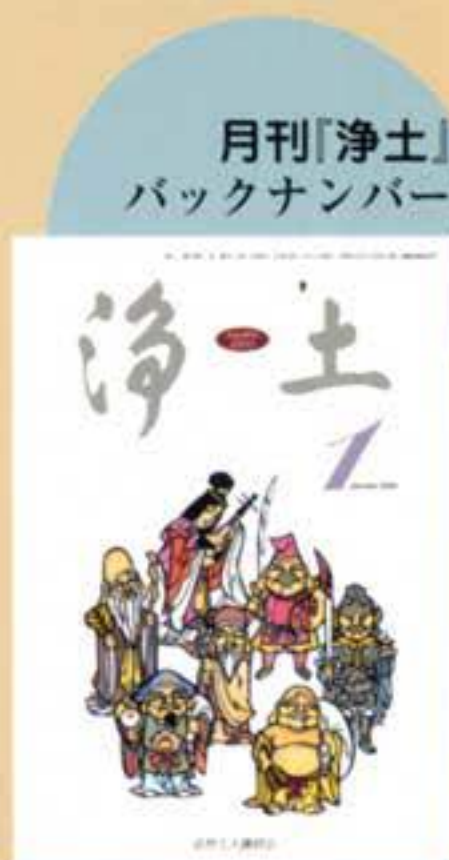
本



『念佛讀本』完全復刻版
1,600円



『差出人は法然さん』
600円



月刊『浄土』
バックナンバー

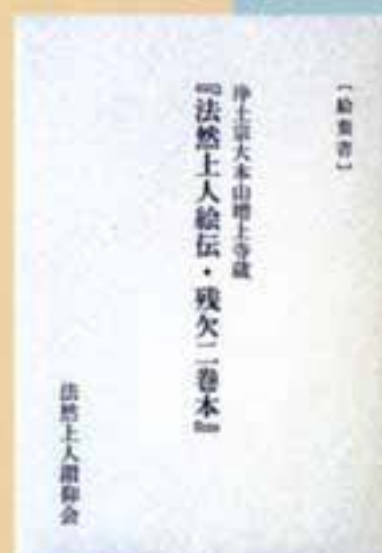
※額装寸法 47 × 59 cm



選擇集十六章之図(額入り)
『選擇集絵解き物語』含む
20,000円 (別途梱抱料300円)



『法然上人絵伝絵葉書』
(8枚セット) 800円



委託販売

増補版『浄土への道
法然上人法語抄』
1,000円



『ブッダ
知れば知るほど』
1,000円



※浄土宗大本山増上寺蔵
「法然上人絵伝・残欠二巻本」より

当会発行の書籍、雑誌のお求めは、
当会へお申し込みください。なお、月
刊『浄土』を除き価格に送料は含まれ
ておりません。別途実費を申し受けます。

法然上人鑽仰会
電話 / 03-3578-6947
FAX / 03-3578-7036